九州における日帰り温泉の構造分析

横　山　秀　司

1．はじめに

第2次世界大戦以後，わが国には2回の温泉ブームがあった。第1の温泉ブームは，50～70年代前半の団体による「温泉慰安型」の温泉旅行である。職場や地域の団体旅行によって熱海，伊東，白浜，別府温泉など各地の温泉観光地において大宴会場を備えた大型の旅館が盛況を見せた時代である。第2の温泉ブームは，70年代後半～80年代の「秘湯温泉型」と称するものであり，特に女性の小グループによる秘湯や鄙びた温泉を巡る旅行の増大である。これはテレビや雑誌などのマスコミによる紹介もさることながら，マイカーの普及，道路網の整備などによって秘湯へのアクセスが改善されたことにもよる。そして現在は「日帰り温泉型」と称すべき第3の温泉ブームにある。90年代始めのバブル経済崩壊以後，安上がりで気軽な温泉，露天風呂が求められ，従来からの温泉場の共同浴場や温泉旅館の浴場，あるいは宿泊施設を伴わない温泉保養館などで多くの日帰り客が入浴を楽しんでいる。またこのブームは，従来の温泉地のみならず，農村部や都市部においても新しい温泉施設の立地を促した。

本稿では，九州を事例として取り上げて，この第3の温泉ブームの実態を明らかにすることを目的とする。なお，この種の研究には山村・小堀(2000) の東京周辺の日帰り温泉地の実態を分析した先駆的研究がある。

2．九州の温泉の分布とその特性

2—1　温泉の分布

九州は阿蘇，久住，雲仙，霧島，桜島など活発に活動をしている火山が多く，それに付随した温泉地が多数存在する。沖縄を除く九州7県の温泉地数（1999年）は322カ所で，全国の約11%を占めている。

まずここでは，近代的な大深度掘削技術の開発されていない大戦直後の九州の温泉地分布をみてみたい。運輸省観光部が1950年に発行した『温泉案内』によれば，九州には93カ所の温泉地（鉱泉を含む）が紹介されている。図1は，その温泉地を九州の切峰面図（岡山 1988）の上にプロットしたものである。切峰面図は侵食によって生じた谷を埋め戻したときに予想される山地の概形を示す図であって，高度の急変する部分は地盤運動の不連続な部分，すなわち主として断層による結果とみなされている。さらに，図には鮮新世以降の火砕流堆積物を除いた新第三紀中新世から完新世までの火山岩地域を表示することによって，火山地域を明らかにした（内嶋編，1995，p.20）。温泉は火山の地下にあるマグマの熱により地下水が温められた火山性温泉と，地下深部で温められた地下水が地殻の断裂部である断層を伝わって湧出する非火山性温泉（鉱泉はこの種のものが多い）とがあるので（岡山 1929，日本応用地質学会九州支部 1999，p.28），図1は自然湧出温泉の分布特性を明らかにするには最適であろう。さてこの図から，別府，久住，阿蘇，雲仙，霧島，指宿などの伝統的な温泉地は，九州の主要な火山周辺に集中していることが明瞭に読みとれる。また，熊本県の火山である金峰山とその周辺，薩摩半島北部の入来・藺牟田の火山岩地域にも分布している。佐賀県の背振の断層群には古湯温泉，熊の川温泉が，熊本

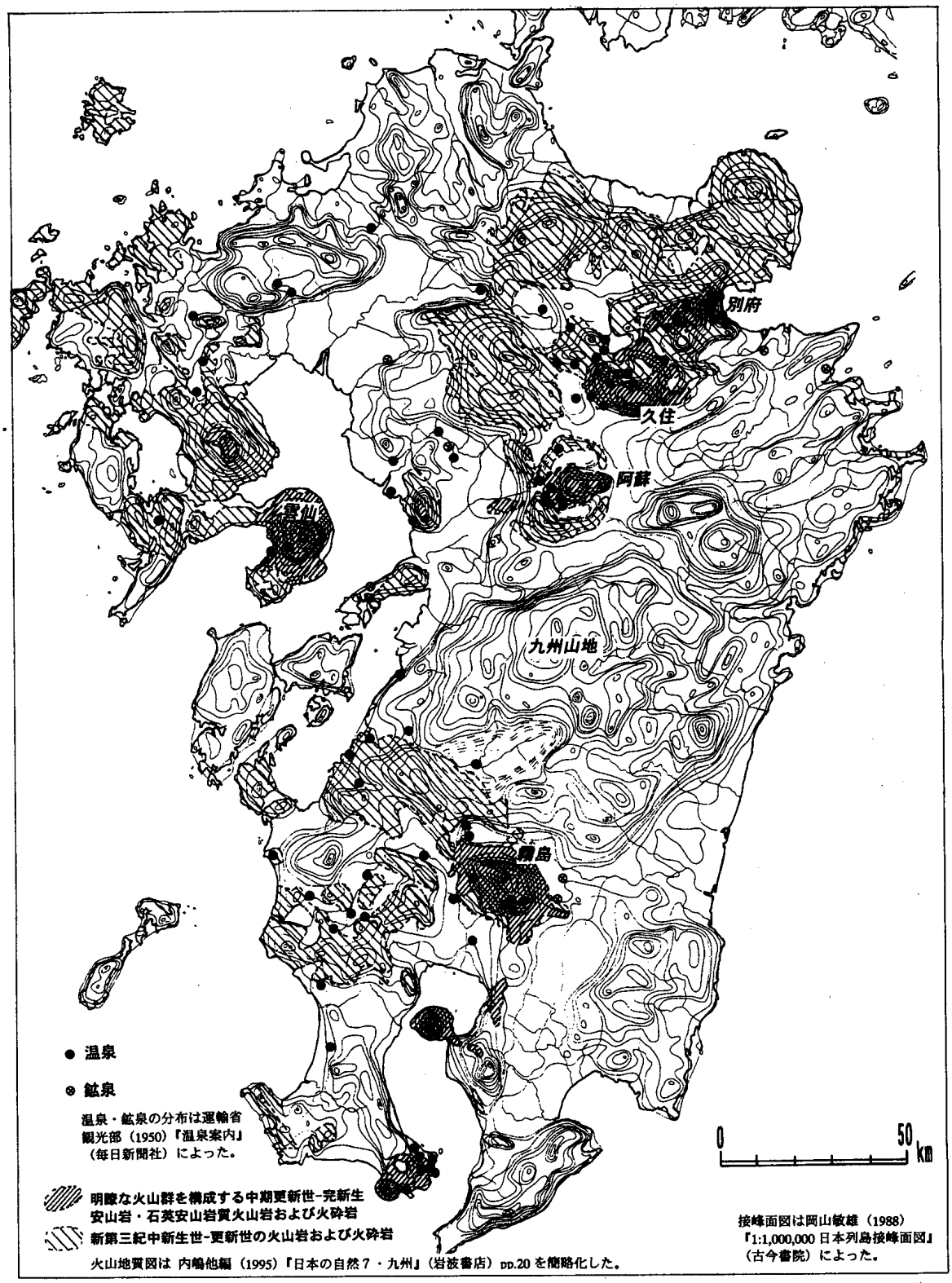

図1　九州における温泉の分布と地形構造との関係

県の日奈久断層線沿いには日奈久温泉，吉尾温泉，湯浦温泉，湯ノ児温泉，湯出温泉などが分布している(注1)。九州中央の九州山地，宮崎県の鰐塚山地，大隅半島の肝属山地などの非火山地域，あるいは筑後平野，宮崎平野，都城盆地などには温泉地は存在していない。福岡県では今日の二日市温泉である武蔵温泉と原鶴温泉が紹介されているが，どちらも断層起源の温泉である。また，この『温泉案内』では温度25°C未満を鉱泉として分類してあるが，九州では福岡県の船小屋鉱泉，大分県の塚野鉱泉，鷺来ガ迫鉱泉，熊本県の赤瀬鉱泉，宮原鉱泉，長崎県の道ノ尾鉱泉，入船鉱泉などが紹介されている。

2—2　温泉地の動向

戦後の九州の温泉地は，団体慰安旅行者を受け入れた別府・雲仙・嬉野・指宿などの歓楽温泉観光地が多く存在する一方で，保養・療養としての温泉地や湯治場が田園地帯から山間部まで多数分布していた(注2)。温泉観光地は，高度経済成長期に急激に拡大して宿泊者を増大させたが，その後は停滞ないしは減少をしている。一方の保養・療養温泉，湯治場は，70年代後半から80年代の第2の温泉ブームによって由布院温泉のように個性を生かした温泉地として新たな発展を見せたところ，あるいは阿蘇の垂玉温泉のように秘湯あるいは鄙びた温泉として都会からの観光者に人気が出た温泉地，さらに90年代に入ると露天風呂・日帰り温泉ブームによって急成長した黒川温泉や長湯温泉など，その展開は多様である。

ここで温泉観光地の別府市と保養温泉地の湯布院町における宿泊者数を比較してみたい（図2）。別府八湯を中心に宿泊者を集めている別府市では，高度経済成長期前半の年間宿泊者数は170～180万人であり，66年に200万人を超えた後は71年に513万人，76年に613万人と右肩上がりで宿泊者が

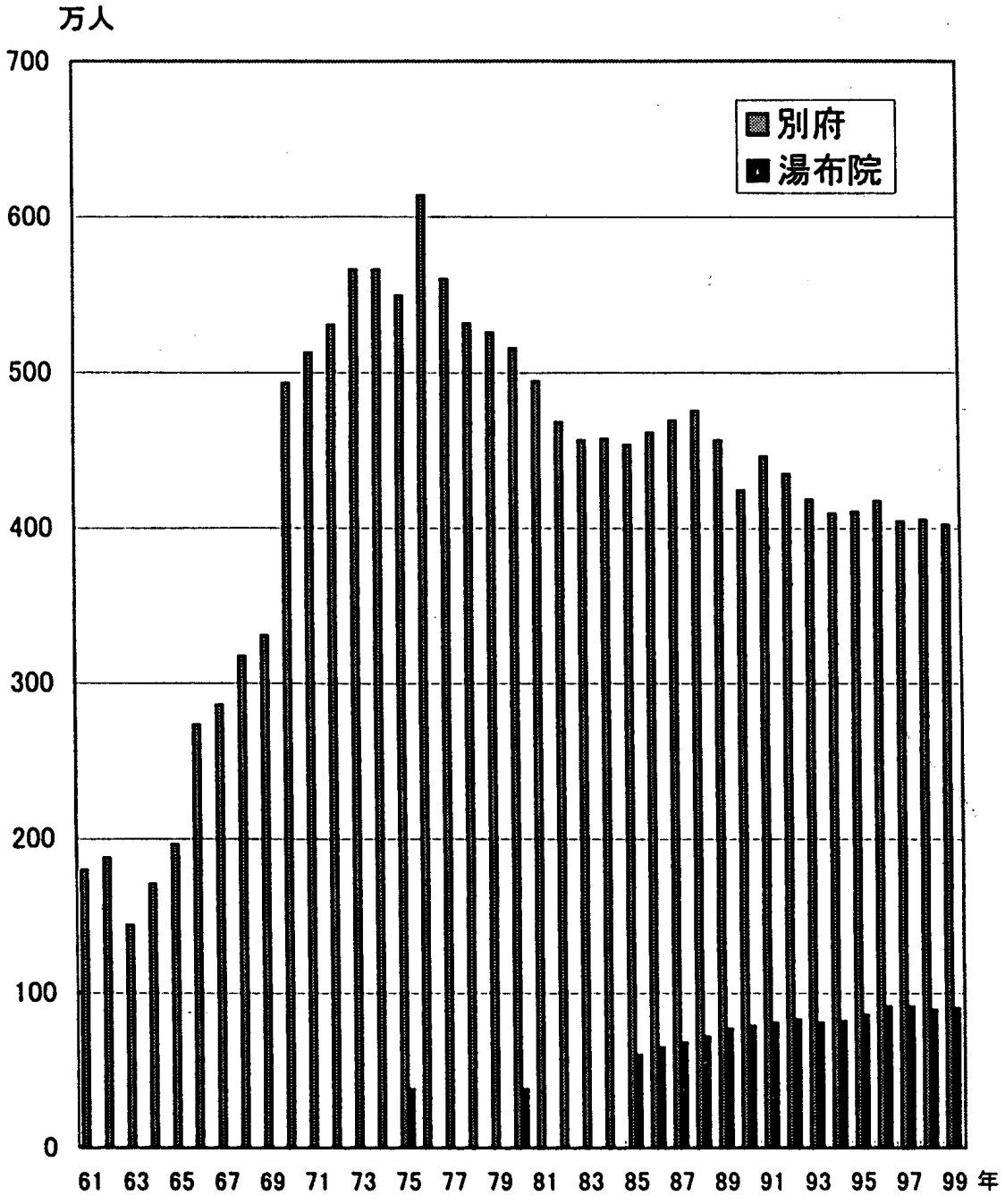

図 2　別府市と湯布院町の宿泊者推移
（別府市役所，湯布院町役場の資料により作成）

増大した。しかしそれをピークにして83年の456万人まで一気に減少する。その後は若干の増加もみられたが，全体的には減少を続け，現在は400万人台すれすれのところで低迷している。とはいえ，年間400万人の宿泊者数は，

箱根町の510万人に次いで温泉市町村としては全国第2位(1998年)であり，熱海市の342万，伊東市の324万を上回る数字である。一方，湯布院町は由布院温泉と湯平温泉を中心に集客しているが，70年代の年間宿泊者は約38万人であったが，80年代以降宿泊者が増大し，96年には91万人まで上昇する。ただその後の伸びは止まり，停滞している。このことは第1次温泉ブームにのって別府は集客を拡大し，由布院は第2次温泉ブームにより拡大したことを示している。

次に90年代の日帰り・露天風呂ブームによって集客を増やした黒川温泉と長湯温泉についてみてみよう。熊本県小国町の田ノ原渓谷沿いの鄙びた温泉場である黒川温泉は，第2・第3の温泉ブームによって入り込み客を増大させた(図3)。黒川温泉は1981年当時，旅館数は14軒で療養温泉地あるいは湯治場的性格が強く，宿泊客は低迷していた。しかし，86年に地元

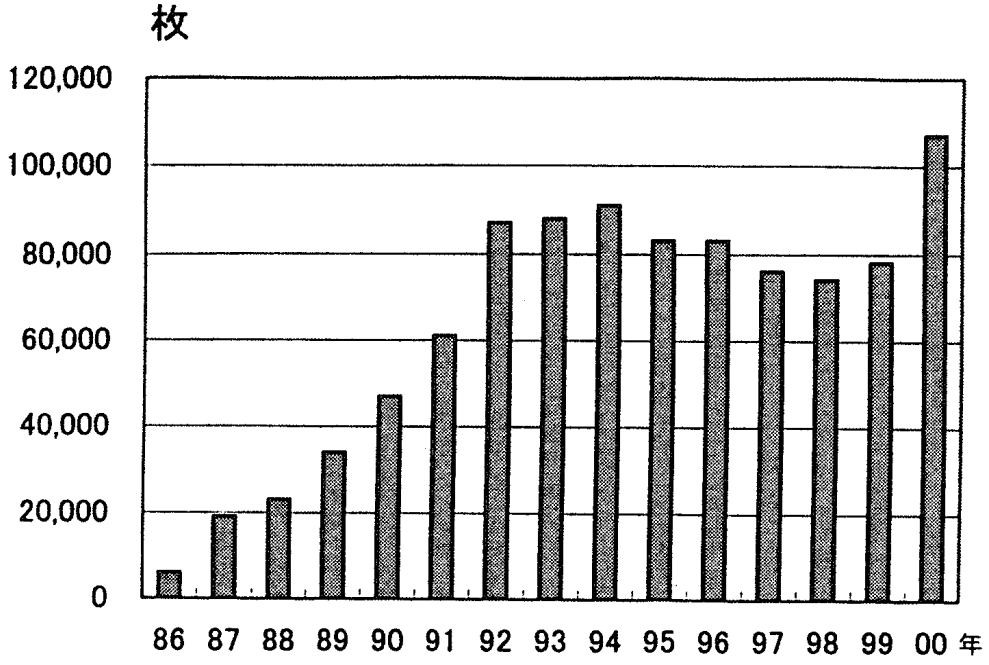

図3　黒川温泉の入湯手形売上枚数
(黒川温泉観光旅館協同組合の資料により作成)

の観光旅館協同組合が入湯手形を発行し，各旅館の露天風呂に自由に入れる制度を導入したことにより人気が上がり，利用者が増大した（山村1998)。入湯手形の売り上げは，86年には約6千枚であったものが90年には約6万枚，2000年には10万枚を超えるほどになった。入込者も89年の約50万人から00年には倍の100万人を超えた。また，旅館数も24軒に増大するなど，鄙びた温泉地から今や福岡都市圏のみならず，大阪・東京からも集客できるほどに知名度が上昇した温泉地となった。

大分県の長湯温泉は，炭酸ガス含有量日本一の炭酸泉として知られていたが，同種の温泉を湧出するドイツのバードクロチンゲンと友好親善都市の関係を結んだのを契機に，ドイツイメージを町づくりに生かしてきた。96年に温泉浴場や簡易宿泊施設を備えた「ドイツ村」，98年には外観をドイツ風にした日帰り温泉施設「御前湯」をオープンさせた。その結果，入込者は増加の一途をたどり，85年の15万人から95年の30万人に増加し，「御前湯」の開設後の99年には50万人を超えた（図4）。1年間に10万人以上の増加をみたことは，「御前湯」への日帰り客の集客効果とみなすことができよう。

3．九州の日帰り温泉の分布と実態

3—1　日帰り温泉ブーム

今日，大きなブームとなっている温泉の日帰りないし一時利用は従来からもみられた。その一つは，東京近郊における船橋，平和島，綱島などの大浴場と宴会場をもった温泉・娯楽施設であり，なかでも1955年開業した千葉県の船橋ヘルスセンターは庶民の手軽な娯楽・保養センターとしてにぎわいを見せ，最盛期の60年代には毎年400～500万人の入込者を集めてい

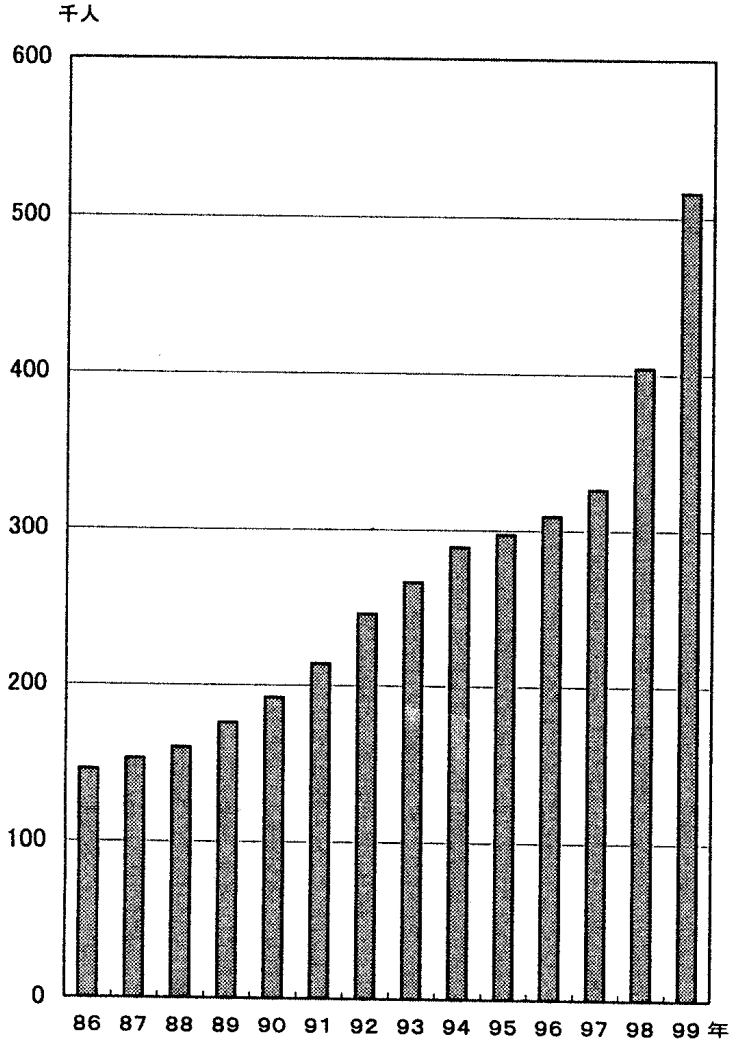

図4　直入町の入込者の推移
(直入町役場の資料により作成)

た。船橋と平和島は閉園したが，ラジウム鉱泉を湧出する横浜市の綱島温泉は今日では日帰り温泉地として新たな展開を見せている。福岡県では福岡都市圏に近い二日市温泉（かつての武蔵温泉）や脇田温泉が同様の性格をもっていたと考えられる。前者では共同浴場の「御前湯（筑紫野市福祉センター)」が存在していたが，85年に糀屋旅館がドイツのクアハウスに学んだという「バーデンハウス」を開設し，都市型のスパー銭湯の先駆けをつくった。後者でも老舗旅館の楠水閣が94年に露天風呂を備えた日帰り温

泉施設として「湯乃禅」を開設したが，これは都市近郊の日帰り・露天風呂ブームの先鞭をつけたといえよう。

地方では都市に近い湯治場的温泉地が週末，あるいは盆や年末年始時の日帰り客の目的地として変化していった。筆者は「日帰り温泉ブーム」が大きなうねりとなる前の90年代前半，宮崎県都城市に在住していた。市内から自動車で30分ほどの安久温泉にある明治時代からの湯治旅館を週末に利用したことがあるが，温泉・昼食・休憩という形での利用者が多数いたこと，また，市内から自動車で１時間ほどの90年に開設した高原町の「皇子原温泉健康村」(民間経営)あるいは92年開設の「サンヨーフラワー温泉」(民間経営)などにも多数の同様の利用者をみた。特に高原町の施設では３世代での利用者が多く，温泉に入り，広間で昼食した後に年寄り達は休憩，子供達は付随した遊園施設で遊ぶというパターンが確立されていた。これは，地方における身近な日帰り温泉ブームの先駆けであったと思われる。

さらに登山者やハイカーが登山後山間の共同浴場で汗を流し，体を癒すという利用形態もあった。北アルプスの蓮華温泉，久住山の法華院温泉，霧島のえびの高原の市営露天風呂がその代表といえよう。ちなみに92年には『九州の温泉と山』(足利・井上 1992) が出版され，登山後の温泉利用ができるコースを紹介している。その他，第２の秘湯ブームによって温泉地の共同浴場などがマスコミで紹介されたことによって，温泉入浴を主たる目的に旅行をするものも増大していった。

こうした流れのなかで，特に90年代中頃から「日帰り温泉」が全国的に大きなブームとなっていったのである。山村(1998，p.92)はブームの背景として，①バブル経済の崩壊で低料金で入浴を楽しめる温泉施設への需要が高まった，②高齢化社会を迎えて健康センターや福祉センターなどに付随して温泉浴場が作られた，③“ふるさと創生１億円事業”や農水省の農

業構造改善事業の諸施設などによって，地域行政体が地域振興の一環として積極的に温泉施設を建設した，④高速自動車道や新幹線の進展によって大都市東京都の近接性が高まった，⑤そしてなによりも，従来温泉資源とは無縁であった非火山地域でも，地下1000メートル以上の大深度掘削によって温泉を確保できるようになったことなどをあげている。大深度掘削技術もさることながら，それに揚水技術，濾過・循環風呂技術の進歩（松田 2001）がこれに加わったことにより，大浴場・露天風呂をもった温泉施設の建設が可能になったことを付け加えたい。さらに，このブームに乗った民間資本による供給の拡大が需要の増大を喚起したと言ってよいであろう。例えば，98年に開設された愛知県の津島健康の里「湯楽」では，事業費は約12億円（内銀行借入金8億円）であるが，年間利用者を初年度21.6万，次年度を22.6万人，それ以後は23.7万人と見積もることによって，9年目から5500万円の黒字となり，13年目には5.18億円の利益を見込んでいる（副島，1998）ように，日帰り温泉施設は利潤の得られる観光・レジャー産業の一つになったからである。

日本観光協会が隔年で実施している国民の観光に関する動向調査の報告書『観光の実態と志向』によれば，「日帰り観光の行動」の目的のなかで温泉浴は，94年が4.9%（8位），96年が7.6%（5位）であり，98年には10.7%（4位）と過去最高となった。2000年は10.2%（4位）と若干割合を減じたが，「風景鑑賞などの行動」(18.5%)，「飲食・買物」(17.0%)，「ドライブ」(11.3%)に次いで4位を保っている。このように，国民の観光行動志向からも，90年代中頃から日帰り温泉観光は定着してきたことが理解できる。なお，主な行動を地域別に上位3位（2000年）までみると，九州では，「風景鑑賞」(12.3%)，「温泉浴」(11.1%)，「飲食・買物」(6.7%) となっており，甲信越，東北に次いで温泉浴が高い値を示している。

3 — 2　九州における日帰り温泉の分布と特色

一口に日帰り温泉あるいは立ち寄り湯といっても，温泉地の共同浴場，湯治場の外湯，市町村や第3セクターが経営する温泉保養施設，都市とその周辺のスパー銭湯，温泉旅館の内湯の宿泊者以外への開放あるいは新設された別棟の温泉施設の開放，さらに最近では道の駅に併設された温泉施設など様々な形態があること，いまだに新設ラッシュが続いていることなどから，日帰り温泉施設数の全体を把握することは困難である。

そこでまず，マップルマガジン2002年版『露天風呂＆立ち寄り湯・九州』(昭文社 2001)で紹介された約400の日帰り温泉施設の分布を地図の上で確認してみたい(図5)。この図と第1図を比較してみると，九州山地の一部を除けば，既存の温泉地以外の九州全体に施設が分布していることがわかる。これは，市町村による積極的な建設，また掘削技術の進歩によるものであることは間違いない。しかしながら，仔細にみれば，その施設は第1に既存の温泉地である別府，久住，阿蘇，雲仙，霧島地区に集中していることがわかる。これは黒川温泉の「温泉手形」で利用できる温泉旅館の内湯・露天風呂の開放，あるいは由布院でも夢想園や由布院ハイツが一時利用者に開放したこと，あるいは別府・鉄輪温泉のホテル風月が「夢たまて筥」を，宝泉寺観光ホテルが「野天浴・湯本屋」と称した外来入浴施設を開設するなど，既存の温泉旅館等が一時利用者に開放し，積極的な集客戦略をとったことによるものと考えられる。また，熊本市の東方から北方にかけての地域に集中していることがわかる。ここには既存の植木・菊池・山鹿温泉が存在していたが，民間の施設に加え，鹿本町の「水辺プラザかもと」，七城町の「七城温泉ドーム」，旭日村の「四季の里旭志」，天水町の「草枕温泉てんすい」，横島町の「ゆとりーむ」など第三セクターないし市町村が運営する入浴施設が90年代後半に誕生したからである。図1では温

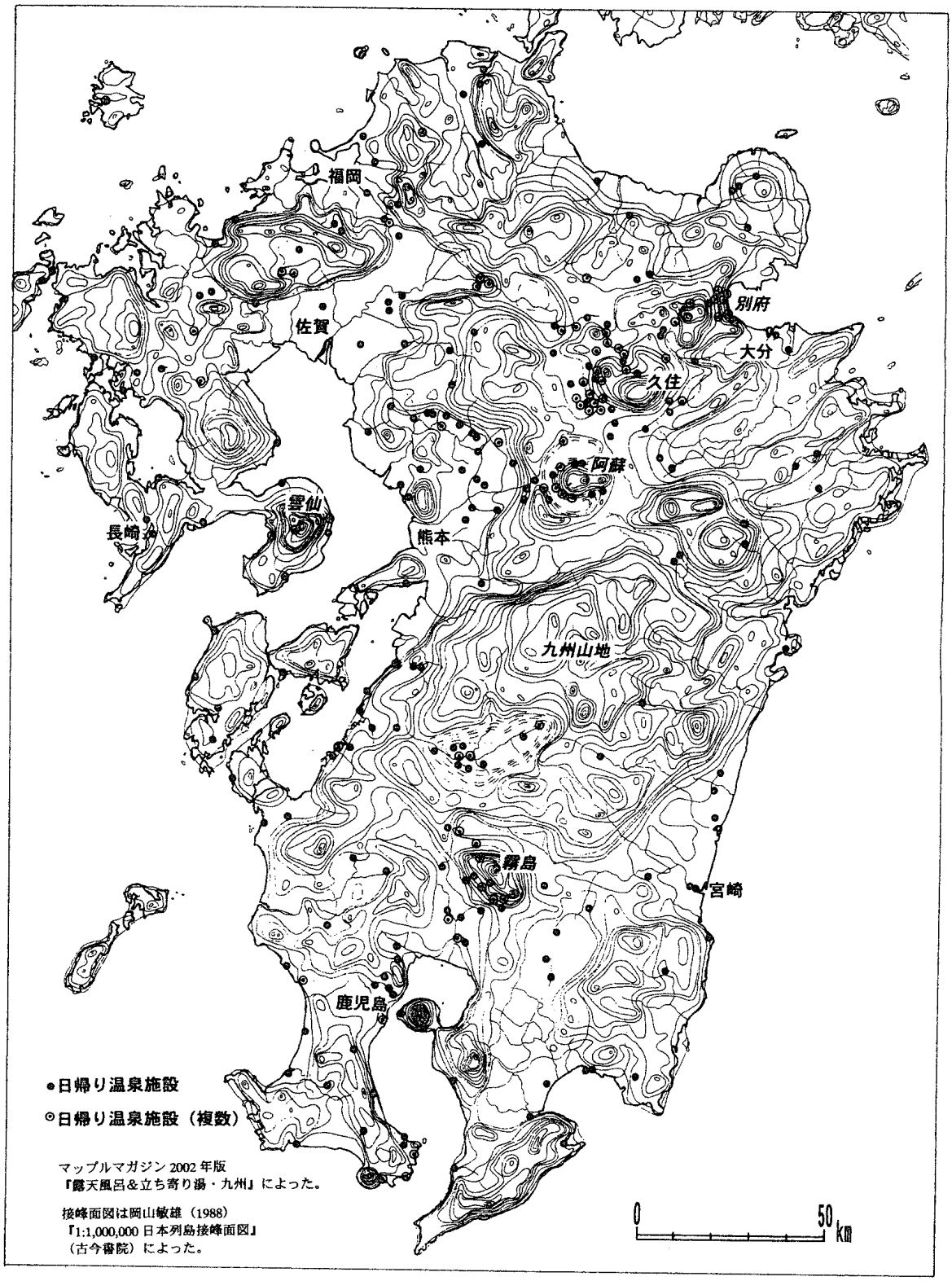

図5　九州における日帰り温泉の分布と地形構造との関係

泉の空白地であった福岡平野，筑後平野，宮崎平野，都城盆地周辺にも立地をみることができるようになった。ここでは都市近郊ではスーパー銭湯型，周辺農村部では行政主導型の温泉保養施設が多数立地した。

3 — 3　現状分析

このような九州の日帰り温泉ないしは立ち寄り温泉の実態を把握するため，筆者は2001年10月に，津田哲也編（2000）『九州日帰り温泉』（山と渓谷社）に掲載の200施設に郵便によるアンケート調査を実施し，157施設から回答を得た(回収率78.5%)。以下，それらの集計・分析結果を示したい。

まず，開設年毎の軒数をグラフにしたのが図6である。第2次世界大戦以前（30軒)，1945～59年（5軒)，60～69年（11軒)，70～79年（5軒）はまとめて表した。80年以降は単年度で集計し，それぞれ経営主体も併せて表現した。戦前までの30軒のほとんどは，別府，久住，阿蘇，日奈久などの伝統的な温泉地に立地したものが多く，その16軒までが民間企業による旅館の内湯の開放であり，11軒は公営ないし市町村が経営する共同浴場である。戦後，特に60年代，70年代に開設した施設の特徴の一つは，宿泊旅行の大衆化によって公営の国民宿舎，かんぽの宿，年金保養センターなどであり，それらの施設が日帰り客を受け入れていることである。80年代の開設は全体で21軒であったが，福岡県の船小屋温泉共和国，二日市温泉バーデンハウス，博多ラドン温泉保養センター，宮崎県のスパーレ21健康ランドなどのような民間経営の温泉レジャー施設，ないしは都市型のスパー銭湯の開設があったことが特徴であり，今日の日帰り温泉ブームの一つの流れをつくった。90年以降は毎年6軒以上の新設をみるようになり，95年には18軒と過去最高の開設数となった。90年代開設の101軒のうち，地方公共団体と第3セクターを合わせた数は48軒であり，全体の約半数に近く，特

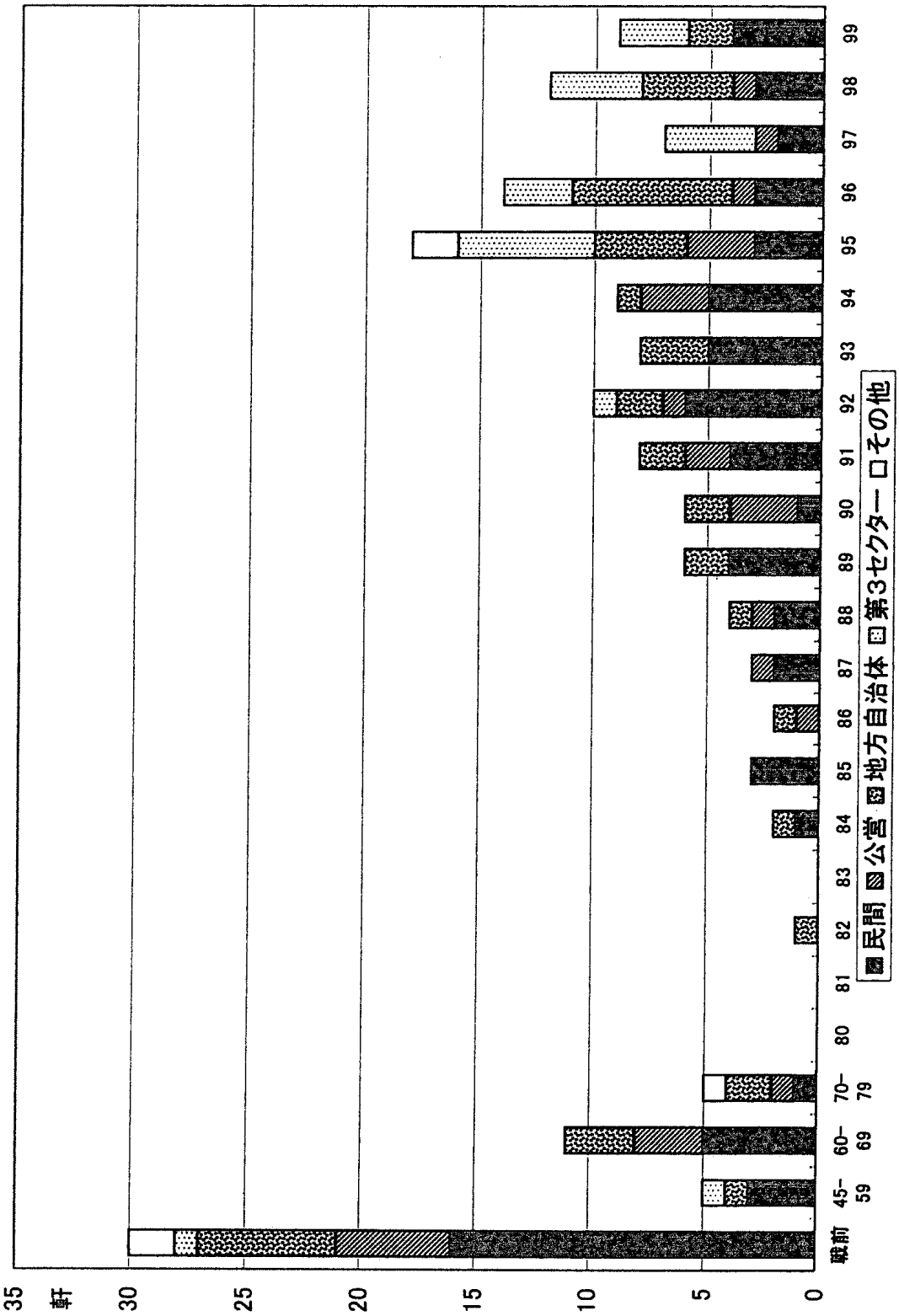

図6　日帰り温泉開設年と経営主体
（アンケート調査によって作成）

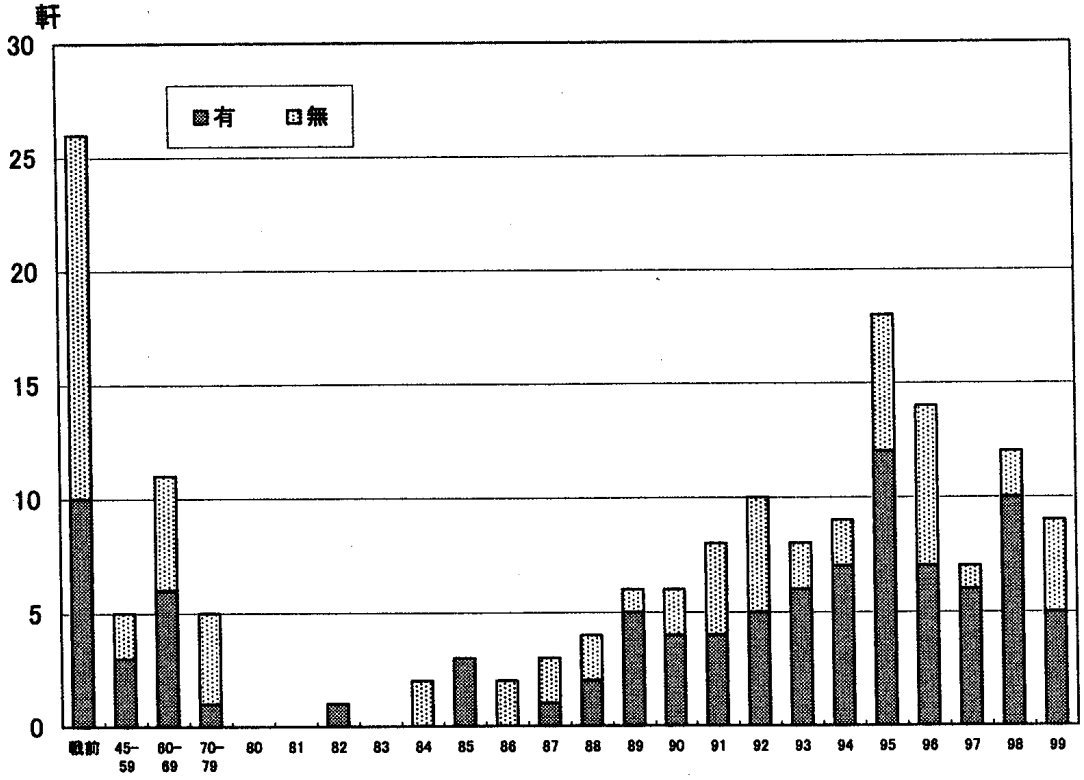

図7　日帰り温泉開設年と露天風呂の有無
(アンケート調査によって作成)

に95年以降その割合が増大していることがわかる。前節において山村が指摘した日帰り温泉ブームの背景を記したが，その③を裏付ける結果を示している。

90年代の日帰り温泉ブームを支えている一つの要因は，露天風呂の存在であるので，開設年と露天風呂の有無の関係を見てみたい(図7)。戦前開設の26軒中，露天風呂をもつのは10軒(38%)，45年から70年までの21軒では10軒(48%)が露天風呂をもつ。80年代では62%，そして90年代では66%へと上昇する。このように近年では露天風呂をもった施設が増加している傾向が現れている。

次に，2000年1年間の日帰り温泉施設の利用者数を見てみたい。回答のあった149施設の内訳を図8に示した。50万人以上の利用者があったのは2

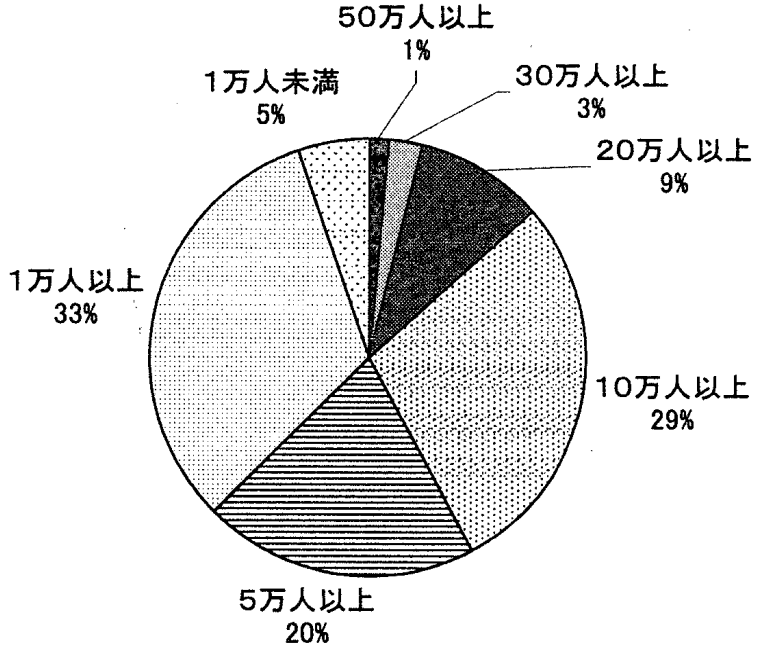

図8　利用者数階層別割合
（アンケート調査により作成）

軒，30万人以上は4軒，20万人以上が14軒であり，5万人～20万人未満が全体の約50％を占め，残りの38％が5万人未満である。なお，10万人以上の利用者があった施設のうち，露天風呂所有率は71％であり，10万人未満のそれは49％であるので，利用者の多い施設ほど高い割合を示す傾向がある。

1万人以上の施設とその利用者の県外率を示したのが図9である。福岡県の施設では10万人以上の利用者のある施設が多いが，全体として県外率は低い。これは福岡市・北九州市都市圏の利用者が圧倒的に多いからである。佐賀県でも10万人以上の施設が多いが，県外率は福岡県より高いものが多い。これは高速道路によって福岡都市圏と結ばれていることから，福岡県からの入込者を集めている結果であると思われる。長崎県では施設数は少ないが，波佐見温泉センター，モンゴル村が県外率30％以上，雲仙小地獄温泉館が20％となっている。なお，波佐見温泉センターは1964年の開

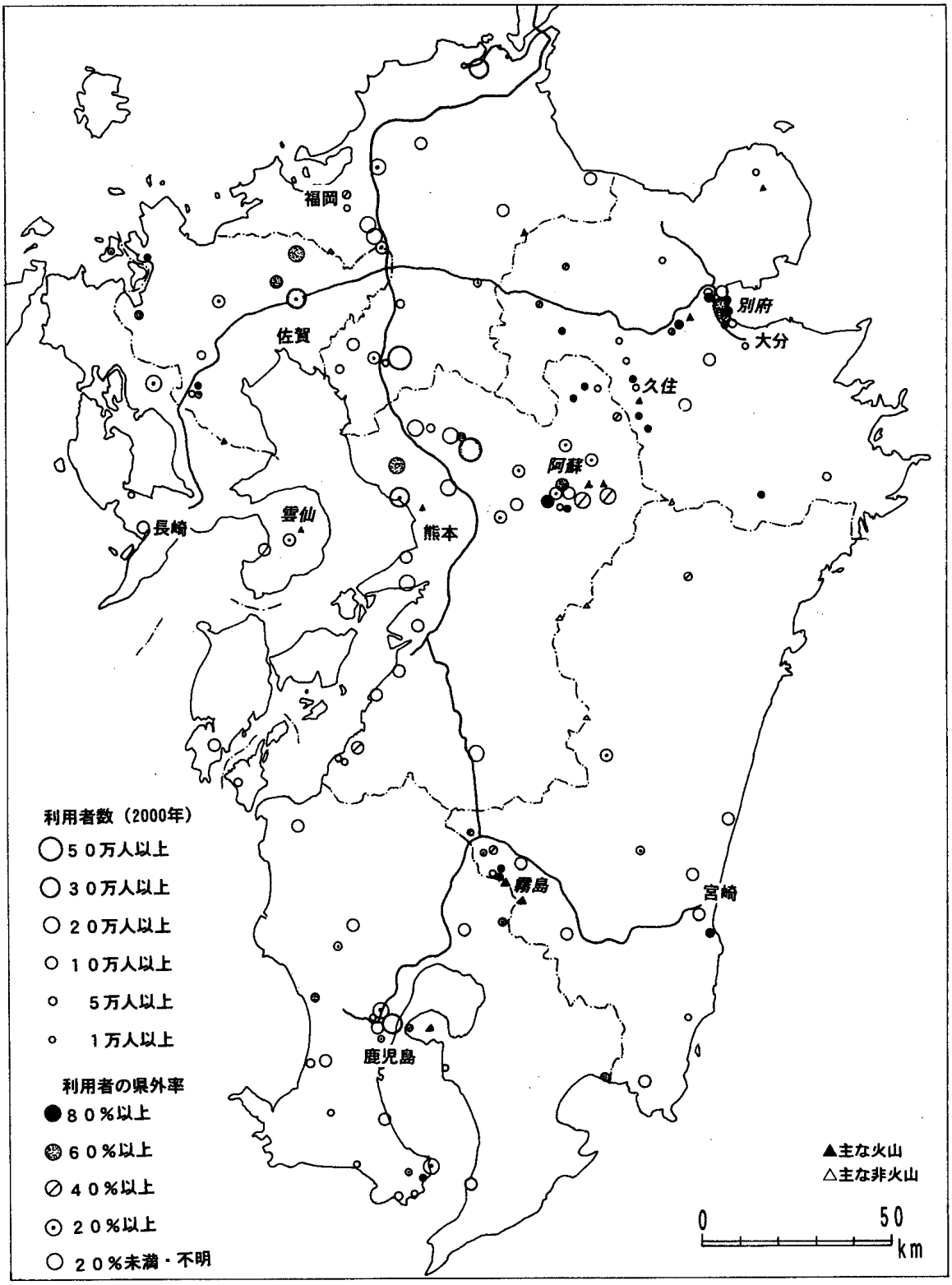

図９　九州における日帰り温泉の利用者と県外率
（アンケート調査により作成）

業で露天風呂もないが，珍しい純重曹泉の良質の温泉として県外にも知られ，リピターが多いからである。大分県の施設は比較的利用者は少ないが，別府や由布院，久住などでは観光資源の豊かな観光地だけあって，県外率80％を超える施設が多い。県南部の宇目町の「藤河内湯～とぴあ」は，利用者は約1万人と少ないが，近くにキャンプ場などアウトドア施設が整備されていることによって県外からの来訪者が多いことによるものと思われる。熊本県の日帰り温泉施設の特徴は，およそ3つに分類されよう。まず第1は，阿蘇地区の施設である。ここでは10万人以上の利用者のある施設が多く，かつ県外率が高いと言うことである。観光資源として評価の高い阿蘇山と温泉によって，県外からの多くの観光者を集めていることによる。第2は熊本市とその北の菊池，植木，山鹿などの温泉地周辺に立地した日帰り温泉施設群である。これらは，七城町の「七城温泉ドーム」，鹿本町の「水辺プラザかもと」，天水町の「草枕温泉てんすい」など90年代に開設した第3セクターの経営によるものが多く，県外率は低い。熊本市ないしは市周辺町村の住民による利用が主体を占めていると言える。第3は，八代から水俣にかけての日奈久断層沿いに，既存の日奈久や湯の児などの温泉旅館の内湯開放に加えて，市町村・第3セクターが開設した施設が存在する。ただし「つなぎ温泉四季彩」以外は，県外率は20％未満と低い。宮崎県は，霧島火山周辺以外は，温泉資源に乏しい。図示した県内17施設の内8施設が90年代の開設である。観光者の集まる霧島周辺の施設は県外率が高いが，宮崎市周辺は，「青島太陽閣」を除いて県外率は20％未満であり，都市型の特徴を示している。鹿児島県では全体的に県外率が低く，鹿児島市周辺では都市型の特徴を示し，他の地域では古くからの湯治場に立地したものが多く，地元利用が中心となっている。

最後に料金であるが，地方自治体・第3セクター経営の施設は，概ね大

人300～500円であるのに対し，民間では800～1,000円となっている。ただし，民間では休憩所利用やタオル使用料を含めて1,000～1,700円に設定しているところもある。

以上のように，全国的な日帰り温泉ブームは，九州でも90年代に入って顕著になってきた。その九州における日帰り温泉・立ち寄り湯の施設形態は以下のように分類することができる。

① 温泉地の共同浴場。由布院温泉の「下ん湯」，湯平温泉の「共同浴場」，鹿児島県の鰻池温泉の「区営温泉」などように地元住民の組合あるいは地方自治体による経営のものである。

② 温泉観光地における温泉旅館の内湯・露天風呂の一時利用者への開放。黒川温泉や由布院温泉などの旅館がその好例である。

③ 温泉観光地の温泉旅館の別棟入浴施設。脇田温泉にある楠水閣の「湯乃禅」，別府・鉄輪温泉のホテル風月の「夢たまて筥」のように，旅館の玄関を通らずにその施設を一時利用できるものである。

④ かつての湯治場の内湯・外湯。宮崎県の安久温泉，吉田温泉，鹿児島県の藺牟田温泉，入来温泉などの小規模な温泉地にみられる。

⑤ 公営の保養施設。国民宿舎，かんぽの宿，年金保養施設などの大浴場の一時利用者への開放。

⑥ 地方自治体・第3セクターが経営する温泉保養施設。1990年代に地元住民の健康福祉施設として，多数開設された。

⑦ 地方自治体・第3セクター・民間が経営するクアハウスあるいはスパ。由布院の「クアージュゆふいん」，武雄温泉の「アネックススポーツランド」などのように温泉プールやサウナなどを備えた施設。

⑧ 都市圏のスーパー銭湯。二日市温泉の「バーデンハウス」が九州におけるその先駆である。今日では，福岡都市圏内では10以上のスーパー銭

湯が開設している(注3)。

⑨　温泉レジャー施設。福岡県の「船小屋温泉共和国」，佐賀県の「嬉野温泉センター」などのように温泉プールやウォータースライダーなどを備えた娯楽性の高い施設である。

⑩　道の駅に併設された温泉施設。現在，九州において温泉のある道の駅は，みずなし本陣ふかえ，有明，不知火，きくすい，喜入，樋脇，くにの松原おおさきの7カ所である。

4．まとめ

日帰り温泉・立ち寄り湯は九州でも大きなブームとなっている。温泉・入浴施設の新規開設数は95年をピークとしているが，新設は依然として続いている。また，九州人の日帰り観光行動としても大きなウエイトを占めるようになった。この日帰り温泉ブームの傾向はしばらくは続くと思われるが，濾過・循環風呂の普及と現行の「温泉法」の不備によって日本の温泉文化が根底から覆えされつつあるという松田（2001，2002）のショッキングな指摘は，今後，温泉利用者に少なからず影響を与えることになろう。この点をふまえつつ，日帰り温泉ブームの今後を見守っていきたい。

注1：辻村（1942，p.192）は「八代湾に臨んで出水の付近から東北乃至北々東に走る地塊崖があって，此れに沿う温泉は湯内，湧出及び湯ノ浦，更に北には日奈久断層崖の下に日奈久温泉が湧出する」と断層と温泉の関係を述べている。なお，湯内は現在の湯川内，湧出は湯出と思われる。

注2：1968年8月の大分県筋湯温泉における調査では，7軒の旅館のなかで湯治客が90～95％を占めていた旅館が2軒，65～70％を占めていた旅館が2軒あった。当時，筋湯温泉はまだ湯治場的色彩が強かった（九重町役場・九重町観光協会 1969）。

注3：2002年2月2日の「西日本新聞」朝刊には，福岡都市圏湯めぐりガイドと称し

て，入館料が1,000円未満の「スーパー銭湯」13軒を紹介している。

〈参考文献〉

足利武三・井上優（1992）：『九州の温泉と山』西日本新聞社。
内嶋善兵衛・勘米良亀齢・田川日出夫・小林茂編（1995）：『日本の自然７・九州』岩波書店。
運輸省観光部編（1950）：『温泉案内』，毎日新聞社。
岡山俊雄（1929）：甲斐国地蔵・鳳凰山下の逆断層。地理学評論，第５巻第11号，949～960頁。
岡山俊雄（1988）：『1：1,000,000日本列島接峰面図』，古今書院。
九重町役場・九重町観光協会（1969）：『九重町観光診断報告書』。
副島雅行(1998)：日帰り温泉施設の市場動向と事業化のポイント。レジャー産業，第31巻第４号，58～69頁。
辻村太郎（1942）：『断層地形論考』，古今書院。
津田哲也（2000）：『九州日帰り温泉』，山と渓谷社（第２版）。
日本応用地質学会九州支部編（1999）：『九州の大地とともに』，築地書館。
松田忠徳（2001）：『温泉教授の温泉ゼミナール』，光文社新書20。
松田忠徳（2002）：公共温泉・心の湯あみ文化が危うい。朝日新聞，2002年２月16日付朝刊。
山村順次（1998）：『新版・日本の温泉地』，（財）日本温泉協会。
山村順次・小堀貴亮(2000)：東京周辺における日帰り温泉地の地域的展開。観光研究，第12巻第１号，１～８頁。

〈参考資料〉

㈳日本観光協会：『観光の実態と志向』，平成６・８・10・12年度版。
マップルマガジン2002年版『九州・露天風呂＆立ち寄り湯』，昭文社。